

2025 年度 東北工業大学大学院 博士（前期）課程 入学試験（1 期）

建築学研究科 専門科目 A 群（建築史及び建築意匠）

【解答例】

1.

ヨーロッパ大陸北方からのゲルマン民族の移動による西ローマ帝国の滅亡という時代背景のもと、古代ローマの古典主義建築が衰退し、あらたに壁とアーチを主体とするロマネスク建築が生まれた。その建築様式の特色は、石材を積み上げた壁と天井のヴォールト、地場の石や彫刻などの風土に根ざした地方色の豊かさである。

2.

日本近世では幕府や藩主などを神仏としてまつる霊廟建築が流行し、とくに豪華な外観をみせる権現造の形式が普及した。その代表作品は日光東照宮であり、具象的で立体的な彫刻が建築を埋め尽くし、黒や白、金箔を駆使した鮮やかな彩色といった特徴をもつ。

3.

図 B は 20 世紀初頭にフランスの建築家ル・コルビュジェが近代建築の基本構成として提唱したドミノシステムであり、柱、フラットスラブ構造、自由な壁配置、階段昇降装置を特徴としている。同概念が実作に展開されたサヴォア邸は、1930 年代のインターナショナルスタイルの代表的な作品である。図 D は 20 世紀末の日本の建築家伊東豊雄の設計によるせんだいメディアテークの断面図であり、揺らぎながら林立しエレベータを内包するチューブ柱とフラットスラブが示されている。

ドミノとメディアテークは 80 年の年月を超えた強い影響関係にある。メディアテークのチューブは、ドミノシステムの昇降装置と柱を一体化させ、光・情報・動線が行きかう経路として、各層の交流をうながす装置として設計された。

4.

建築意匠において、建築を知覚させる「光の存在」は重要であるが、太陽光が直接室内に入ることによって明るくなるだけでなく、窓によって光量を絞ることで光の存在を際立たせる例もある。例えば、ロンシャンの教会（ル・コルビュジェ設計）では、1m 以上の厚い壁に穿たれた台形の小さな窓から漏れる光が壁の断面を照らす間接光・色彩光の効果がある。暗い教会の中で光とイメージが浮かび上がる神秘的な効果により光の存在をより強く感じる。

【出題意図】

建築学専攻の建築史・意匠分野の修学においては、日本および世界の建築の歴史や意匠に関わる基本的な知識をもち、さらに、建築の特徴を的確に捉える記述力や考察力が必要です。これらの到達度を確認することを出題意図とした問題です。